

## 令和元年度 第 62 回 関東高校サッカー大会 大会総評

報告者：高体連技術部員 埼玉県立大宮南高等学校 上原克彬

令和元年6月1日から3日の3日間で第62回関東高校サッカー大会が茨城県で開催された。この大会は各都県1位の8チームをAグループ、2位の8チームをBグループとして、それぞれトーナメント方式で実施された。Aグループの1位を優勝、2位を準優勝とし、準決勝で敗退した2チーム及びBグループの1位を3位とする大会規定がある。埼玉県からはAグループに武南高校、Bグループに浦和東高校が出場した。

武南は1回戦で日大藤沢(神奈川)と対戦し、先制したが前半のうちに逆転を許す展開。後半の早い時間に同点に追いつくが、ゲーム終盤に再び失点しリードされる。追いつけずに迎えたアディショナルタイムに得たフリーキックからPKを獲得し、これを確実に決めて延長戦に持ち込んだ。延長戦は互いにスコアレスとなり、PK戦では全員がきっちり決めた日大藤沢に対し、1、3本目を外して敗退となった。

浦和東は1回戦で東久留米総合(東京)と対戦し、デザインされたコーナーキックから狙い通りに先制する展開。後半も最後まで集中を切らさずに守り切って2回戦進出を決めた。翌日の佐野日大(栃木)との対戦は、序盤から浦和東がボールを保持する展開になったが、5バックで守りを固め、カウンターを狙う相手に苦戦を強いられて前半をスコアレスで終えた。後半も同様の展開だが、相手のクリアミスや獲得したロングスロー、コーナーキックから何度もゴールに迫るが相手の堅守を崩せないでいると、逆に相手のロングスローの混戦から得点を奪われ大会初失点。さらに同点に追いつくため前がかかったところをカウンターから追加点を奪われた。佐野日大が最後まで体を張った守備を見せてこのまま試合は終了し、2回戦敗退となった。

令和最初の関東大会は優勝が國學院久我山高校(東京)、準優勝は葦崎高校(山梨)、3位は前橋育英高校(群馬)、日大藤沢高校、湘南工科高校(神奈川)という結果で幕を閉じた。

武南が対戦した日大藤沢は1-4-3-2-1という埼玉県内のチームではあまり見られないシステムや戦い方をするチームだった。開始直後からの両センターバックと3ボランチの安定感あるビルドアップや極端に高い位置をとる両サイドバックを生かしたサイド攻撃、2シャドーと1トップの3人のキープ力や細かなパス交換で時間を作り、そこから両サイドバックを含めた攻撃を展開。攻撃にスイッチが入ると人数をかけて速く、サイドチェンジやオーバーラップで相手に狙いをつけさせず、質の高いクロスや決定力の高さがあった。中央もサイドも崩せる攻撃力と、穴のない守備をする好チームに武南は前半開始直後から流れを奪われた。それでも後半は相手陣地でのプレーを増やし、相手の左サイドにできたスペースを的確に突いてクロスからゴール前でのヘディングを決め、アディショナルタイムではPKを決めた。県予選では見られなかった劣勢や2度のビハインドを追いつくという粘

り強さと埼玉1位代表というプライドを見せた。その中で、追いついてから逆転に向かう体力やフィジカル、しっかり蹴ること・ボールを止めることなど、選手交代も含めたところでプレーの質を維持してゲームを運ぶこと、さらには延長やPK戦まで戦い抜いて勝ちを掴み取るエネルギー不足という部分が課題として残った。今回の浦和東は堅守、多彩なセットプレーによって県予選では数々の強豪校を撃破してきたが、佐野日大は浦和東以上に徹底して堅守速攻スタイルを貫きゲームを進めるチーム。1-5-4-1システムで後方のスペースを埋め、5バックと中盤4人でブロックを形成し、攻撃は1トップにボールが入って仕掛けたときにチームとしてスイッチを入れて仕掛けていくという意図で得点を狙う戦い方であった。浦和東にとっては、1試合を通して守りを固めてくるチームとの対戦となり、前半からボールを保持する展開だったが、最後まで得点を奪うことができなかった。サイドから攻撃の形はいくつか作れたがクロス、シュートの質など、一人一人のクオリティに課題が残った。また、空いた中央のスペースを有効に使う場面がなく、相手としては守備の際に狙いを絞るやすい状況になってしまった。サイドも中央も崩せる攻撃のバリエーションがあればもっと相手に脅威を与える攻撃を展開できるのではないか。また、得点源のセットプレーでゴールを奪えなかったが、スカウティングされた上で、それを上回るクオリティや応用力を身につけていく必要性を感じさせてくれた。また、競り合いや球際強くゴール前を固めてきっちり守れる相手、特にGKが的確な判断と安定して安全確実なプレーをする相手からは得点できていないが、そこをどうこじ開けていくか。今回の敗戦を通して何ができて、何ができないのかが明確になったところで、更なる進化を期待したい。

今大会を振り返ると、大会上位を占めたのはボールを保持してゲームを進めるチームという傾向があった。準優勝の蕪崎はリスクを冒さず相手DFライン背後へボールを流し込み、前線からの連動した守備と個々の運動量、全員でのハードワークでゲームを進めるチームだったが準優勝に輝いた。天候にも恵まれ、3日間比較的涼しい環境での試合となり、どのチームもハイインテンシティーの実現につながった。それもあり、延長戦に突入する試合が全14試合中7試合(PK戦までもつれたのは2試合)あり、終盤で試合を決める、または土壇場で追いつく試合が多かった。また、5人の交代枠をフルに使うチームが多数あり、その上で拮抗して見ごたえがある試合が多かった要因としては、各チームの層の厚さや参加チームのレベル差があまりなかったことが表れていた反面、勝ち切るという部分や試合運びに課題が残ったといえる。

茨城県開催の今大会は最終日に「鹿島スタジアム」で試合ができることが選手にとっては大きなモチベーションとなり、メンタル面は充実していたように思う。しかし、大会レギュレーションとしてエントリー18名で交代枠5人、3日間で3連戦という過酷な面があり、特に決勝戦に進んだ2チームは、ともに2試合連続延長を戦い抜いての決勝戦というフィジカル的な負担が著しく高いものになってしまった。インターハイの本大会ではエントリー17名とさらに少数での戦いとなるが、どの大会においても選手たちが日ごろの努力の成果を発揮し、伸び伸びと全力でプレーできるように環境を整えていくことが課題とな

っている。選手への過度な負担を緩和できるようなルール変更等が今後必要となるだろう。最後に、今大会を通過点として、武南、浦和東の両校にはさらなる飛躍とインターハイ県予選での活躍を期待して総評とする。